

御使いガブリエルが告げた「七十週」の預言

【聖書箇所】 9章 20節～27節

はじめに



●前回はダニエル書 2 章から、バビロンの王ネブカデネザルの見た正夢について学びました。その正夢は**終わりの日に起こること**を示されたものでした。「ダニエル書は終末についてどのように教えているか」、今回はダニエル書 9 章から「**七十週の預言**」について学びます。

●ダニエルはネブカデネザルが最初にバビロンに人質として連れて行った有能な若者でした。ダニエルはバビロンの王に仕えていました。バビロンがメディア・ペルシャによって滅びた後も、そのメディア・ペルシャの王にも仕えていた人物でした。

●ダニエル書 9 章 23 節は、御使いガブリエルが神から遣わされてダニエルのところに来て語ったことばです。9 章 1 節でダニエルは、ダリウス王の治世の元年に、預言者エレミヤのことばによって 70 年の捕囚が終わる事を知りました。これはおそらく預言者エレミヤがバビロンの捕囚となった人々に宛てた手紙によってだと思われる。

●エレミヤ書 29 章 10 節には「バビロンに七十年の満ちるころもわたしはあなたがたを顧み、・・・あなたがたをこの所(エルサレム)に帰らせる。」と記されています。当時の偽預言者ハナヌヤは二年ほどで捕囚となった人々は解放されると人々に安易に語っていましたが、エレミヤはハナヌヤの語っていることは偽りであることを人々に告げ知らせました。事実、捕囚の 70 年(実際は 50 数年程)は神が意図をもって定めたものであり、神の民に心を尽くして神を捜し求めさせるためでした。しかもそれは彼らにとって将来と希望を与えるためのものだったのです。ダニエルは、その手紙(文書)によって、イスラエルへの帰還が近い事を知り、主に祈ったのです。そのことが 9 章 3～19 節に記されています。ダニエルは神の民の罪を悔い改め、あわれみを示して下さるように神に祈りました。

1. 御使いガブリエルが伝えた「七十週の預言」

●ダニエルがそのような祈りをささげていたときに、御使いガブリエルが神から遣わされてダニエルに近づいて来て、次のように告げました。22～23 節 「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを受けるために出て来た。あなたが願いの祈りを始めたとき、**一つのみことば**が述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を語れ。」

●ガブリエルの来訪の目的は、ダニエルに「悟りを授けるため」(新改訳)でした。新共同訳では「目覚めさせるために」と訳しています。ダニエルを目覚めさせる神からの「**一つのみことば**」とは神の奥義、すなわち、「**隠された神の秘密**」です。それはダニエルが祈り始めたときにすでに神から発せられたものでしたが、それをダニエルに悟らせるために御使いガブリエルによって届けられたのです。その内容はダニエルが考えているものとは異なっていました。いったい何が異なっていたのでしょうか。それは「七十年」という理解です。ダニエルはエレミヤの手紙を通して70年の捕囚が終わることが近いことを知って、悔い改めの祈りをし、その祈りの中で「主ご自身のために、御顔の光を、荒れ果てたエルサレムに輝かせ、治めてください」と願いました。しかし御使いガブリエルが神から遣わされて、70年の捕囚が終わるのを知って祈っているダニエルに向かって、実はそれは間違いであることを教えます。「**あなたの民とあなたの聖なる都(エルサレム)については、七十週が定められています。**」—このことばを聞き分け、幻を悟るようと御使いガブリエルはダニエルに伝えました。つまり、ダニエルは、「七十年」ではなく「七十週」、正確に言うならば「七十週年」(490年)だということを知られたのです。したがってダニエル書における終末の教えは、この「七十週」をいかに正しく理解するかにかかっています。

2. 「七十週」が定められているのは、神の民と聖都エルサレムに対して

●22節と23節に3度「**ブーン**」(**בון**)というヘブル動詞が出てきます。これは神の奥義を理解し、その秘密を悟ることを意味します。その秘密の内容は24節にあるように「あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている」というものです。「あなたの民」とはイスラエルの民(ユダヤ人)のことです。また「聖なる都」とはエルサレム、あるいは、エルサレム神殿のことです。どちらか一方の事柄でなく、二つの事柄が合わさっての預言なのです。この二つの事柄について、七十週が定められているとはどういう意味なのでしょうか。

(1) 「七十週の預言」にある六つの計画

●「七十週」という意味について、聖書の中では1日を1年と見なす解釈があります(民数記14:34、およびエゼキエル書4:6を参照)。とすれば、単純に計算すれば、7日×70週=490日で、490年を意味しています。つまり、「七十週が定められている」とは、490年経つとメシア王国が到来することを意味しています。

●24節には「七十週の預言」にある六つの計画(あるいは目的)が記されています。つまり、「七十週」(490年)が終わると、右の図にあるように、六つのことがなされるということです。

●No.1~3まではメシアの初臨によって神の側では実現していますが、神の民イスラエルはまだそれを民族的に受け取っていません(ヘブル9~10章)。No.4~6はやがて再臨されるメシアによって実現するものです(ヘブル9:28)。「永遠の義」は完全なメシア王国でしか成り立ちません。「幻と預言とを確証する」とは聖書のすべての幻と預言が成就するということです。最後の「至聖所に油を注ぐ」とは、メシア王国(千年王国)の時代に建てられる第四神殿において、神のシャハイナ・グローリーが現わ

神の六つの計画(目的)	
1	そむき(「ベシヤ」 בשיא)を終わらせる
2	罪(「ハッター」 חטאת)を終わらせる
3	咎(「アーヴォーン」 אָוֹן)を贖う
4	永遠の義をもたらす
5	幻と預言とを確証する
6	至聖所に油を注ぐ

れるところに特別な油が注がれることを意味しています。ソロモン時代の第一神殿ではその献堂式においてシャハйна・グローリーが現われました。そこで仕えている祭司たちが立ってられないほどの主のご臨在がありました。しかし捕囚からの帰還後に建てられた第二神殿、および、終末に反キリストがユダヤ人のために建てるとされる第三神殿においてもそれは現われません。再び、シャハйна・グローリーが現わされるのはメシア王国(千年王国)に建てられる第四神殿と考えられます。これが「七十週」の意味する預言です。

(2) 三つの時期に分けられた「七十週」

●「七十週」の預言は三つの時期に分けられています。最初は「七週」(49年間)、次に「六十二週」(434年間)、そして最後の「一週」(7年間)の三つです。なぜ、このように分けられているのが重要なポイントです。

9:25		9:26	9:27	
7週(49年)	62週(434年)	歴史は止まったままの状態(※2)	70週目の1週(7年)	メシアの再臨とその王国
※1		神殿崩壊とユダヤ人の離散 A.D.70～現在	偽メシア	大患難 千年王国の到来
神殿再建令		メシアの初臨 / 教会時代	荒らす忌むべき者	異邦人の時の終わり

※1 「七十週の起算点」について

●エルサレムの神殿再建命令、すなわち、70週の起算点となる年は以下のようにさまざまな異論があります。

- (1) B.C.457・・・ペルシャの王アルタシャスタ王の第七年目と理解する説(ダニエル9:25/エズラ記7:11～26)。この説に従えば、7週と62週の後、すなわち483年後であるA.D.27年にメシアは公の働きを初め、その3年後に十字架に磔にされることによって、「油注がれた者は断たれます」(ダニエル9:25～26)という預言が成就します。
- (2) B.C.445・・・神殿と城壁、エルサレムの再建をアルタシャスタ王が命じた時と理解する説(ネヘミヤ2:1～8/エズラ4:7～23)
- (3) B.C.539・・・クロス王による勅令の時と理解する説(Ⅱ歴代誌36:22～23/エズラ1:1～4、6:3～5)。この説の根拠とするところは、エレミヤ書の70年の捕囚預言(エレミヤ25:11、12/29:10)と、イザヤ書の「わたしはクロスに向かっては、『わたしの牧者、わたしの望む事をみな成し遂げる。』と言う。エルサレムに向かっては、『再建される。神殿は、その基が据えられる。』と言う。」(イザヤ44:28)の預言の成就という観点からです。
- (4) B.C.519/518・・・ダリヨス王による勅令(エズラ5:3～17、6:1～12)

※2

●A.D.70年にエルサレムの神殿はローマ軍によって完全に破壊され、ユダヤ人は世界に離散するようになりました。それ以来、歴史は止まったままの状態です。1948年のイスラエル建国以来、ユダヤ人たちはエルサレムに帰還しつつありますが、エルサレムの神殿は未だ再建されていません。歴史が再び動き出すのは、ユダヤ人の帰還と神殿の再建というこの二つがそろった時です。つまり、最後の1週(7年間)以降と言えます。



3. ダニエル書 9章 25節~27節までの注解

【新改訳改訂第3版】ダニエル書 9章 25~27節

25 それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。

27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。

(1)25節

●25節にある「七週」は、7日×7週=49日となり、49年間を意味します。また「六十二週」は、7日×62週=434日となり、434年を意味します。「七週」と「六十二週」を合わせると「六十九週」となり、49+434=483(年)となります。なぜここで二つの期間に分けられたのか。それはおそらく「広場とほり」が二度建て直されたからと考えられます。25節の「油そそがれた者、君主」とは、おそらくアルタシャスタ王ですが、彼が来るまでに、聖なる都(神殿)は二度、苦しいところを通りながら建て直されたことを意味しています。

(2)26節

●26節の「その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない」とは、イエシュアが油注がれて三年半にわたる宣教活動を経て十字架の死にかかれることを預言しています。「彼には何も残らない」とは、イエシュアは死から復活して天に昇られたために、この地上では目に見える姿として何も無いという意味

です。続いて、「やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する」の「君主」とは、偽キリスト(反キリスト)のことです。そして「その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている」とは、異邦人の時が終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされることを意味します。異邦人の時が終わる時までとは、反キリストがキリストの再臨によって滅ぼされる時までです。それまでは「異邦人の時」なのです。70 週目に入るまでの歴史の時計は止まった状態です。なぜなら、この時計は神の民ユダヤ人と聖なる都エルサレムがいっしょにある時のみ動く時計だからです。つまり、**「七十週の預言」は、神の民と聖なる神の都エルサレムが同時に存在しているときに関するもの**なのです。

(3) 27 節

●27 節「彼は一週の間」の「彼」とは反キリストのことであり、続く「一週の間」とは七十週預言の最後の1週(7年間)のことです。つまり、反キリストの支配が7年間に及ぶことを意味しています。ただし、7年の前半の「半週の間」(つまり3年半)は平和的なメシアの様相を呈しています。おそらくすべての宗教的混淆による平和がもたらされると考えられます。この平和的メシア(実は、偽メシアです)は、神の選びの民であるユダヤ人のために第三神殿を建てることまでします。そしてユダヤ人を完全に信用させます。

●しかし後の「半週の間」(3年半)は、偽メシアとしての本性を顕わにします。「荒らす忌むべき者が翼に現われる」にある「翼」とは「神殿」のことです。すなわち、偽メシアが「神殿」の座に着き、自らを神と称して人々に礼拝を強要するようになることを意味しています。その時こそまさにユダヤ人にとって大患難の時を迎えるのです。

※「患難期^前携拳説」では、異邦人クリスチャンは天に引き上げられるために患難には遭わないと考えますが「患難期^後携拳説」では、異邦人クリスチャンも患難に遭うと考えます。

●しかし「ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかり」ます。それは再臨されるメシア(キリスト)によって反キリストは完全に滅ぼされるということの意味しています。

終わりに

●終わりの日の預言がダニエルに示され、このことを悟り、理解するようにと告げられたのです。現代に生きる「神に愛されている」私たちも、ダニエルと同様にこのことを悟る必要があります。なぜなら、**神のご計画のマスタープランを知ることによって自分の立ち位置が見えてくるからです**。ゴールが見えることで、目に見えることに一喜一憂することなく、将来と希望を、確信をもって生きることができるようになるからです。

●敵であるサタンはこの学びを快く思わないはずですが、神は、地理的にも、歴史的にも、必ずイスラエルを中心としてご自身のご計画を進められます。神のご計画のマスタープラン(全体像)、特に、終わりの日についての理解が希薄であれば、自信をもって生きるキリスト者にはなれません。なぜなら、聖書理解(解釈)において脆弱性をかかえていることになるからです。終末預言は決してやさしくはありません、とても複雑です。それゆえ、繰り返し、繰り返し、根気強く学ぶ必要があります。